

法琳雜記（続）

中西久味

目次

- 一、法琳と天台智顗
- 二、法琳の著述について（以上前稿。『比較宗教思想研究』第二輯所収）
- 三、陳子良考
 - （一）陳子良伝小考
 - （二）陳子良異聞
- 四、道士秦世英について
- 五、彦棕の著述をめぐって（以上本稿）

三、陳子良考

(一) 陳子良伝小考

法琳の名著『弁正論』に序文を寄せ、かつ注釈を試みることによって、この著述の流布に寄与したのが陳子良である。彼については「文学の雄伯にして、群儒奉戴す」(『統高僧伝』卷二四・大正藏卷五〇―六三八a。以下、大正藏の引用はTと表記)、「才術は縦横にして、声實字に振るう」(『集古今仏道論衡』卷丙・T五二―三八二b)、「言は世の表となり、学は儒林に冠たり」(『法琳別伝』卷上・T五〇―二〇二a)などと伝えられている。いずれも護法の文章であり、過褒の気味があることを割り引いてみても、当時その文名が高かったらしいことが推測されるのである。陳子良についてこれまで注目されているのは、唐の東宮官である右衛率府長史であり隠太子李建成的東宮学士であったこと、および貞観六年(六三三)に没したとされていることである。とくにその没年は『弁正論』の成立を考察するにあたって有力な手がかりとなっている。彼には文集十卷があったらしいが、むろん散佚してしまい、いま『全唐文』卷一三四に六篇の文章、『全唐詩』卷三九に十三首の詩が収集されているにすぎない。前者について、その典拠と考えられるものとあわせて書き出してみると次のようになる。

- (一) 「為奚御史彈尚書某(人)入朝不敬文」(『文苑英華』卷六四九)
- (二) 「為王季卿与王仁寿書」(『文苑英華』卷六八六「為蜀道安撫寿光公王季卿与王仁寿書」)
- (三) 「弁正論注序」
- (四) 「隋新城郡東曹掾蕭平仲誄并序」(『文苑英華』卷八四三)
- (五) 「平城縣正陳子幹誄并序」(『文苑英華』卷八四三)
- (六) 「祭司馬相如文」(『文苑英華』卷九九八)

この六篇の文章を通して陳子良の事跡もある程度推測できるのである。とりわけ(Ⅳ)(Ⅴ)は近親者の蕭平仲と陳子幹のために著された誄であり、蕭平仲は彼の妻の従兄、陳子幹は実弟である。以下ではそれぞれ「蕭平仲誄」「陳子幹誄」と略称することとするが、この二篇の文中には陳子良自身の事跡についてもしばしば言及されている。そこで、いささかの詮索を加えておくことにしたい。

陳子良は呉人とも伝えられ『唐詩紀事』卷四など、彼自身その詩句のなかで「我が家は呉会」(於塞北春日思歸・『文苑英華』卷二八九)と述べている。呉会は呉郡から会稽郡の一带。ただしこれは特定の地名を言うわけではなく、ひろく江南地方を指し、もと南朝の人であることを言っているはずである。その出自を言うばあいには潁川の陳氏を名のっている(『弁正論序』・T五二―四九〇)。祖父は梁の右將軍・信義太守、父は陳の晋安王府諮議・呉平侯であつたという。しかし史書のたぐいにはそれらしき人物は見あたらず、詳しいことについては明らかではない。陳子良の生年は五七五年(陳の太建七年)。十一歳年下の陳子幹が六一六年に三十一歳で没していることによつて知られる。陳子幹は三男であつたから、年齢差から見ても、陳子良は長男であつたと思われる。陳の滅亡の年、開皇九年(五八九)四月、一家をあげて金陵から長安の灊水のほとりに移住した。陳主陳叔宝に従つて移住した百官のうちに含まれていたのであろうか。父は出仕することなく、四年のち開皇十三年(五九三)に没している。陳子良は時に十九歳。そのち貧窮を極めたいが、長安の郝朔なる人物のもとに身を寄せ、儒学や史学を教授するようになり、士大夫の子弟が笈を負うて彼のもとに雲集するようになったという。

やがて隋の越国侯楊素の記室に任用されたことが、「讀德上越国公楊素」(『文苑英華』卷二四八)という長詩によつて知られる。楊素はいうまでもなく隋の元勳であり、煬帝のために奪位を画策した人物でもある。ただし、この詩はおもに楊素の突厥征討の功績を讃歎したものであり、「匈奴燕薊を軼おかし、烽火幽并を照らす／天子命じ

て薄さか伐たんとし、脈を受けて専征を事とす」の句を含む。匈奴とは匈奴の別種と目されていた突厥のこと。楊素が突厥の征討に従事した記録は、開皇十八年（五九八）から仁寿元年（六〇一）にわたって、つごう四回見うけられる。⁽⁴⁾ そのうち第一回から三回までは靈州道（靈武郡）より出ているが、第四回の仁寿元年には雲州道行軍元帥として諸軍を率い、雲州（定襄郡）⁽⁵⁾ から出て突厥を撃破した。これによつて長城付近から突厥を駆逐し、「是れより突厥 遠く通じ、磧南に復た虜庭無し」と伝えられる（『隋書』卷四八・『北史』卷四一の楊素伝）。陳子良の詩中に燕薊・幽并などの地名が見えていることを文字どおりに受けとめるとすれば、これは代州総管の韓洪が恒安で突厥に大敗したことをきっかけとして行われた第四回の征討のことではないかと考えられる。このとき楊素はいわゆるオルドスの北方にまで黄河を越えて遠征し、納遠川で阿勿思力俟斤を撃破した。⁽⁷⁾ 『北史』卷十一、隋本紀上によれば、仁寿元年十二月のことである。また『通鑑』卷一七九には、十二月から翌仁寿二年の三月ころまでのこととしている。⁽⁶⁾

この詩のなかで「濫りに此に書記を明けなくし、何を以てか過榮に謝せん」と述べていることから、陳子良はおそらくこのころ任用されたばかりであったと思われる。二十七歳前後であったはずである。なお、彼の詩「於塞北春日思婦」は、季節から見ても、この遠征のさいに詠まれた可能性があらう。また彼はのちに自らのことを「閼隴に契闊し、冀代に連翩す」とふり返っているが（『蕭平仲誄』）、この頃までについて語っているものと思われる。

楊素はついで、仁寿二年八月に崩御した皇后独孤氏の陵墓の造営に当たることになる。このとき埋葬地を占ったのが蕭吉である。蕭吉はかくて隋朝が二世三十年で滅亡することを予見し、ひそかにその族人の蕭平仲に告げたという（『隋書』卷七八・藝術伝、『北史』卷八九・藝術伝上）。この蕭平仲こそ、陳子良が彼のために誄を撰述した妻の従兄にほかならない。蕭平仲は冀州司法參軍・礼部員外郎などを歴任しており、陳子良もまたさきのよ

うに遠征に従つて冀州にも滞在したらしいから、その頃すでに両者の交渉があつたものと推測される。楊素は大業二年(六〇六)七月に没する。また蕭吉は梁の武帝の兄長沙宣武王懿の孫であつたが、大業十年(六一四)ころに没している。しかし、このとき、大業七年(六一一)に始まつた高麗の征討をきっかけとして、隋はすでに大乱に突入していたのである。

この間にあつて、大業九年二月、新城郡東曹掾に任ぜられていた蕭平仲は郡の官舎で病没する(五五九―六一三。五十五歳)。蕭平仲は梁の武帝の甥鄱陽王範の孫であつたという。陳子良は計報が届くや、ただちに誄を撰述したらしい。そのなかでは「余れ主簿に任ぜられ、眉山の川においてす。⁽⁹⁾ 陳子良は計報が届くや、ただちに誄を撰述したらしい。そのなかでは「余れ主簿に任ぜられ、眉山の川においてす。亟⁽¹⁰⁾は琴台に会し、兼ねて名賢に遇う。花の朝月の夜、置酒し題篇す。近ごろ新城に之⁽¹¹⁾き、暫く累日を申⁽¹²⁾ぬ。謂えらく君は積善す、永く元吉を保たんと。別後⁽¹³⁾を言わざるに、忽ちに斯の疾に嬰る」と述懐しているのである。これによれば、陳子良は当時眉山郡(四川省眉山県)、ないしその管轄下の県の主簿に任ぜられていたらしい。⁽¹⁴⁾ 眉山郡は蕭平仲の在任していた新城郡(四川省三台県)と同様に蜀郡(成都)に隣接している。したがつて両者はしばしば往来していたものと推測される。また文中の「琴台」とは、必ずしも特定の場所を指しているとはかぎらないが、もし限定するとすれば、司馬相如が弹琴したと伝えられる樓台を指している可能性も考えられる。司馬相如の琴台と伝えられる場所は、後世すくなくとも二カ所知られており、一カ所は成都の西郊を流れる浣花溪のほとり、もう一カ所は現在の四川省遂安県付近、すなわち当時の相如県にあつたとされている。⁽¹⁵⁾ そのうち、ここでは眉山郡と新城郡の中間に位置する蜀の中心地である成都を念頭に置いているのではあるまいか。蕭平仲には成都宝園寺の僧玄統と談論したというエピソードも伝えられている。⁽¹⁶⁾ いずれにせよ、隋末の戦乱を避けて、比較的平穩であつた蜀の地に士大夫知識人たちが集つていたことが推測され、陳子良も蕭平仲もその仲間に含まれていたようである。陳子良の文名もそれら人士たちの間に高まつていたことと思われる。

ところが、并州平城県（山西省和順県西方）の県正に就任していた彼の弟陳子幹は、隋末の動乱に巻きこまれて、大業十三年（六、六）、三十一歳で戦死したのであった（「陳子幹誄」）。

さて、陳子良は蕭平仲の没後も隋の滅亡まで四川に留まっていたらしい。（Ⅱ）「為蜀道安撫壽光公王季卿与王仁壽書」という一文は、唐の相国録事參軍・正議大夫の肩書きを持つ王季卿のために、隋の將軍王仁壽に宛てた書簡を代筆したものである。王季卿はこの書簡によって、相王すなわち李淵のもとに帰順することを王仁壽に勧告したのであった。いうまでもなく李淵は、関中に入るや義寧元年（六一七）十一月、代王侑を皇帝に即位せしめ、自らは大丞相・唐王となった。翌年三月には、さらに位を進めて相国となり、相国府を置いている。そのうえで、同年五月に煬帝の討報が届くと自ら即位したのであった。この書簡には王季卿の肩書きに相国が附けられているから、義寧二年（すなわち武徳元年、六一八）三月から五月の間に著されたものと推測される。王季卿なる人物については不明であるが、この書簡の題名をそのまま信用するとすれば、このとき蜀道安撫の任に就いていたという。李淵は入関するとまず巴蜀の招撫に努め、義寧元年十二月頃には雲陽県の県令詹俊ならびに武功県の県正李仲衰を遣わしてこの地方を支配下に収めたことが知られている。王季卿もまた彼らとあい前後して蜀に派遣された人物ではなかったかと考えられる。したがってこの書簡の代筆をした陳子良も成都近辺に居住し、隋が滅亡する直前には、すでに唐の治下に入っていたことになるわけである。ちなみに、この書簡は奏功しなかったらしい。王仁壽はこのとき隋の將軍として、巴陵郡（湖南省岳陽市）に拠って隋に反旗を翻していた蕭銑を討伐していたが、煬帝が弑され隋が滅亡したことを知るや、同僚の將軍張鎮州（周）とともに蕭銑に降っているからである。蕭銑は武徳四年にいたって唐に降り斬り殺されることになる。しかし、のちの王仁壽については全く知られない。

武徳元年五月には唐王朝が成立し、六月には世子建成が皇太子に立てられる。陳子良はこの東宮官のひとつ、

右衛率府長史に任ぜられ、あわせて東宮學士に充てられている。⁽¹⁶⁾ 右衛率府長史は正七品上。その時期については不明であるが、武徳五年には隋の左右侍率を左右衛率府に改称しているから、この官名に従うとすれば、この年以降に東宮官に就いたことになる。またその経緯についても不明であるが、彼とともに東宮學士であったという賀德仁は、隋のころ楊素と親しく、齊王暕の記室ともなっていた。賀德仁はそのいっぽうで李建成とも早くから親しく、皇太子が隴西公であったときからその府友となっていた。陳子良はさきのように楊素の記室に任用され、弟の陳子幹は齊王の府に召し出されたこともあった。⁽¹⁷⁾ あるいは賀德仁と旧知であった関係でもあろうか。

ところが、武徳九年(六二六)六月に玄武門の変が勃発し、同年八月には秦王李世民が即位する。陳子良はこのときまで東宮官であつたらしく、この政変で東宮が廢されたため地方官に出されたのではなかったかと推測される。どうやら貞觀と改元される前後には、果州相如県(四川省蓬安県)の県令としてふたたび蜀に赴いたらしい。彼の「入蜀秋夜宿江渚」(『文苑英華』卷二八九)という詩には、故郷を離れる旅愁も語られていて、中央を離れる気分がそこに投影されているとすれば、この途次の作である可能性も考えられる。(Ⅵ)「祭司馬相如文」は、相如県令の陳子良が、貞觀元年(六二七)五月十六日にとりおこなった祭奠のさいのものである。着任早々に、県の象徴ともなっていた司馬相如を祭つたのではなかったか。なお、県令陳子良撰の「唐相如県石龕仏像記」が、はるか明代ころまで県治に残されていたとも伝えられる。⁽¹⁸⁾

以後、陳子良はそのまま相如県の県令であつた。弟陳子幹のための誄は、貞觀六年(六三二)二月十日の夜、相如県で亡弟の霊を夢みたことをきっかけとして著されたものである。『唐詩紀事』卷四によれば、陳子良が没したのもこの年、貞觀六年のこととされている。これに従えば、五十八歳であつた。相如県で没したはずであるが、突然の死であつたらしいことは、のちにあらためて取りあげることとする。

以上、推測をまじえながら陳子良の生涯を辿ってみた。南朝の人であり、中下流の家柄の出身にすぎなかった彼の事跡には不明な部分が多いが、彼と法琳とが相い識ったのは、東宮學士となった武徳年間からのはずである。またさらに、法琳とともに『弁正論』を修訂したという道会は、犍為武陽（四川省犍為県）の人で、益州（成都）嚴遠寺で出家している。しかも義寧元年十二月頃に詹俊と李仲衰が招撫のために巴蜀に遣わされたさい、先導することを申し出た上疏文が記録されている（『統高僧伝』卷二四・道会伝。T五〇一六四二b）。当時、道会もまた陳子良と同様な立場にあったと推測される。ただし、道会が『弁正論』の修訂に関与したのは、高祖李淵の崩御によって朝覲のために長安に出たさいのことであつたと記されるから、貞觀九年五月以後のこととなる。このとき陳子良はすでに没していたはずであり、両者の関係について直接言及するものはない。しかし、陳子良が成都などで道会と相い識り、道会と法琳を仲介する役割を果たした可能性も否定できないであろう。

（二）陳子良異聞

陳子良は一部にはその才能を認められながらも、いわば歴史のうねりのなかで姿を消してしまった人物にほかならず、彼についてはかすかな光芒が察知できるにすぎない。ために後世では、陳子昂の兄であるというような憶測までなされているほどである。ここでは、陳子良と同時代の人々がすでに彼にまつわる神異な話を語り伝えていることに注目しておきたい。

唐臨（六〇一？―六六〇？）の『冥報記』は仏教を背景とする応報譚を集めたものである。その巻下「唐・張公謹妾」の項には魏郡の馬嘉運が語ったという話が記録されている。あらまは次のようなものである。

貞觀六年正月のこと、馬嘉運は東海公の使者に迎えられて冥府に赴き、その冥府の記室に就任することを要請される。馬嘉運は自分は経学を修めたけれども文才には劣ると説いてかろうじて免れるが、そのさい文章に

優れるものを問われて陳子良の名を挙げる。また馬嘉運は冥府で同郷の張公謹の妾に出会い、彼女はいわれなく張公謹に殺されたことを三年間天曹に訴えつづけていたが、天主となつてゐる王五戒が張を擁護しつづけていたために妨害され、このほどやっと張が冥府によつて追補されることになったと告げる。かくて馬嘉運は蘇生する。その年七月に綿州の人、姓が陳、名が子良なる者が死亡したのち一晩して生き返り、東海公の記室に任ぜられようとしたが文字を知らないために帰されたと言ふ。文章に優れるのは呉人の陳子良であり、両者をとりに違えたとする。のち呉の陳子良が突然死亡し、張公謹もまた死亡した。兩人が没したのち、馬嘉運は益州に向かう東海公の使者にふたたび出会い、陳子良が冥府で彼を訴えてゐるが、馬嘉運にはかつて蜀で池魚を救つた功德があるために罪を免れてゐると教えられたという。

この話は馬嘉運が冥府に赴いてその体験を語つたとするいわゆる冥界譚となつてゐるが、陳子良にかかわるいくばくかの消息を伝えていると思われる。

まず、この話では、陳子良と張公謹にかかわる事柄がないまぜにして語られているために、雑然としてゐる感じを免れがたい。しかしそれは、彼ら二人がほとんど同時に死亡したことを伝えているのもあろう。張公謹はもと王世充の部下であつたが、玄武門の変で功を立て、ついで突厥の頡利可汗を討伐し、突厥の覆滅についても功績があり、『旧唐書』卷六八・『新唐書』卷八九に立伝される。享年については前者では年三十九、後者では年四十九としていて相異する。ただし彼の死去にさいしては、太宗が辰日であるにもかかわらず哭泣の礼を行つたことが記録され、注目されてゐるのである。民間の陰陽書では辰日に哭泣することは不吉とされてゐるにもかかわらず、太宗は、張公謹の死を衷情より哀惜する意を表明し、宮中より出御して哭泣を強行し、張公謹にたいして破格の礼遇を示したと伝えられる。したがつて没した時日についても記録があるが、『貞観政要』卷六ではそれを貞観七年のこととし、その他の記録では貞観六年としてゐる。『通鑑』卷一九四ではさらに詳し

く、貞觀六年（六三二）四月辛卯（八日）に張公謹が没し、翌九日壬辰に太宗が哭泣したと伝えている。もっとも確実なはずの『貞觀政要』の記録が、その他の記録と齟齬をきたしているのがいぶかしいが、いま後者の貞觀六年とする記録に従えば、『唐詩紀事』が伝える陳子良の没年と一致する。これらの記録はいずれも宋代になってからのものであり、『唐詩紀事』のほうが逆に『冥報記』のこの話に拠った可能性も否定できず、なお断定はできないが、この話のように陳子良と張公謹が同年に没したことはひろく知られていたようである。してみると、陳子良は陳子幹のために誅を撰した貞觀六年二月のち、ほどなくして年内に死亡したものと考えられる。この話によれば七月以降のことになろうか。その直前の四月には張公謹が没している。しかもこの話によって、陳子良の死は突然であつたらしいことが窺われるのである。

馬嘉運もまた実在の人物であり、『旧唐書』卷七三・『新唐書』卷一九八に立伝される。彼が陳子良の文名を知っていたことは、この話から明らかであろう。馬嘉運はもと三論教学に詳しい僧であつたが還俗し、貞觀十一年に太学博士を拝したのち、同十九年に国子博士となつて没している。彼はかつて隋末に劍南に趣いていたのであり、蜀の士人に学問おそらく経学を講授したと伝えられている（『册府元龟』卷七六八）。隋末のころといえは陳子良も蜀地に居住していたわけであり、陳子良の文名を知るようになったのではなかつたか。馬嘉運はこの話を貞觀中に九成宮で太宗に言上し、中書侍郎の岑文本がそれを記録したと『冥報記』には記録されている。それによれば貞觀十八年四月から八月までのころと推定されるのである。したがつて陳子良と張公謹が没して十二年を経たころ、馬嘉運はその晩年になつて、この話を太宗に言上したことになる。また岑文本は別にこの話を親しくしていた唐臨に伝えたのもあつたらうか。

『冥報記』の撰者唐臨もまた、武徳三年（六二〇）に王世充の討伐に向かつていた隠太子李建成本に策を奉つたことにより、はじめ直典書坊なる官に任ぜられ、さらに太子右衛率府鍔曹参軍事に任ぜられている。この官は

從八品下。武德九年に玄武門の変が勃発し東宮官が廢されることによって、万泉県(山西省万榮県南方)の県丞に出されたのであった。すなわち、もとの左右侍率が左右衛率府と改称された武德五年からの三、四年ほどの間、陳子良は唐臨の直接の上司であったはずなのである。しかも、彼らは同時に地方官に出されたはずでもある。

以上のようなことを考慮してみると、陳子良と張公謹は、實際にほぼ時をおなじくして死亡したらしい。また、ここにとりあげた『冥報記』の話では、張公謹については、冥界でも擁護されていたために不当にも生きながらえたと描写されているに對し、陳子良については、そこに馬嘉運も一役買っているのではあるが、いわなく冤罪で死亡したとしていのである。陳子良が呉人であり、蜀で没したことも馬嘉運などは承知していたかもしれない、この物語では別人とされている四川の綿州と呉の陳子良は、同一人物の分身であった可能性もある。もと東宮官であった陳子良をデフォルメする必要があったのかもしれない。陳子良と張公謹は、玄武門の変を境として対照的な途を辿ったはずであり、この変で功のあった張公謹はその死にさいしても破格の礼遇を受けたのにたいして、隱太子李建成の東宮官であった陳子良のほうは、蜀の相如県に出されたまま、その地で没したらしいのである。このような話が語り伝えられていることによって、一部には文名を賞賛されながらも、充分その才を発揮することなく終わった陳子良にたいする馬嘉運や唐臨などの人士たちの哀惜の念を看取しようとするのは、穿ちすぎであろうか。

四、道士秦世英について

武德九年(六二六)四月二十三日に發せられた仏・道二教の統制令が、玄武門の変の勃発によってひとまず撤

回されることとなり、貞観初年ころには法琳は終南山の龍田寺に幽居し著述にいそしんでいたようである。しかし依然として仏教と道教のあいだには確執が続き、朝廷においても貞観五年には僧尼道士に父母を礼拝せしめることを試み、貞観十一年には齋供の行位や称谓において道士女冠を僧尼の上位に置くなどの詔が出されていた。そのようななか、貞観十三年（六三九）九月、道士秦世英が突如として、『弁正論』は皇室を誹謗したものであると讒訴し、そのために法琳は益州に流されることになったのであった。この道士秦世英（太宗の諱を避けて秦英とも記される）についていささか指摘しておきたい。

『統高僧伝』巻二四および『法琳別伝』巻中には秦世英について次のように記している。

「黄巾の秦世英なる者あり。方術を挟み、以て榮を邀む。遂く儲貳を程器す」（T五〇一六三八a）

「黄巾の秦世英なる者あり。薄さか醜禁を閑い、粗ば医方を解す。伎術を挟み以て時に佞す。因りて志を儲后に得たり」（T五〇一六四a）

後者は前者に文飾を加えたにすぎないであろうが、秦世英は医術によって当時の皇太子李承乾にとりいつたというのである。これはどうやら事実であり、『唐会要』巻五〇の龍興観の条によれば、長安の崇教坊にあったこの道観は、もとの西華観であり、秦世英の祈禱によって承乾の病氣が治癒したために貞観五年に建立されたのであった。

「貞観五年、太子承乾疾あり。道士秦英に勅して祈禱せしむ。愈るを得。遂く立てて西華観と為す。……（神龍）三年三月二十四日、復た改めて龍興観と為す」

こうして皇太子李承乾の信任を得た秦世英は、皇太子の側近となり、その勢を借りて法琳を讒訴するにおよんだのであろう。

ところが、皇太子李承乾についてはしだいに素行に関する醜聞が広まり、太宗の激怒を買うことになる。か

くて皇太子は廃位されるにいたる。その醜聞の一例を『通鑑』卷一九六には次のように伝えている。

「太子 太常の樂童称心を私幸し、与同（ひと）に臥起す。道士秦英・韋靈符 左道を挟み、太子に幸さるるを得たり。上之（はなはだ）を聞き、大いに怒る。悉く称心らを収めて之を殺す。連座して死するもの数人。太子を誚讓すること甚至し」

秦世英は、皇太子が称心という樂童を寵遇した事件にからんで、誅殺されたのであった。これは仏教側にとつては、道教攻撃の格好の材料となったわけである。仏教側の資料のなかで、この事件を詳しく伝えている『法苑珠林』には次のように言う。

「近ごろ貞観十三年に至りて、西京の西華觀道士秦英・会聖觀道士韋靈符・還俗道士朱靈感あり。並びに薄さか章醮を解す。勅して東宮に事えしむるに、東宮を惑乱す。結びて大意を謀り、事を為さんとして果たさず。秦英・靈符・靈感等、並びに誅斬せらる。私宅財物、及び婦兒あるものは、並びに配して官に入れたる」

当然ながら、皇太子の醜聞よりも、秦世英などの道士たちが皇太子を扇動して何らかの事件を企てたことを示唆し、道教への攻撃が前面に出されているのである。

この事件は『通鑑』では貞観十七年の下に掛けられているが、それはこの年四月に李承乾が皇太子を廃位されたことによる。おそらく『法苑珠林』のように貞観十三年に勃発したのであろう。秦世英が法琳を讒訴したのはこの年九月のことであるから、法琳の下獄とほとんど同時に、称心の事件が問題になり、秦世英もまた誅殺されたらしいのである。

仏教側の脳裏には秦世英の讒訴のことが刻まれていたはずであるから、したがって、両事件を関連づけようとする傾向も否定できない。道宣は『統高僧伝』卷二四および『集古今仏道論衡』卷丙に法琳の伝記を立てる

にあたつて、「時に朝廷の上下、(秦世)英の構扇を知る。御史韋悰、英の飾詐し庶俗を疑陽るを審し、乃ち奏して弾じ」た(後者に拠る。T五二一三八五)として、韋悰の彈劾文を載せ、かくて秦世英は「狂狷を以て誅せらる」としている。一見しただけでは秦世英は法琳への誣告罪で誅殺されたような書きぶりとなっているのである。当時、治書侍御史であつた韋悰という人物については不明であるが、法琳にたいする審問官の一人でもあり、同時に秦世英の罪状をも審問していたらしい。彼は法琳の冤罪を証明するにふさわしい人物として持ちだされたかたちである。

さて、以上のように秦世英のことをことさらに取りあげたのは、彼が勢力を有することになったそもそのきつかけが、その医術と呪術によって皇太子の病氣快癒に功績があつたことによるとされていることである。実は同様な記事が、中インドの僧で『般若燈論』など三部三十五卷を伝訳した波羅頗迦羅蜜多羅 (Prabhākaramitra 波頗蜜多羅などと略称。五六五―六三三) の伝記中にも見えているのである。

「時に太子 患に染り、衆治に效無きがために、勅を下して頗(波頗蜜多羅)を迎えて入内せしむること一百余日。親問に承対して帝旨を虧わす。疾既に漸に降え、辞して本寺に出ず。綾帛等六十段、并及に時服十具を賜う」(『統高僧伝』卷三・T五〇―四四〇b)

波頗蜜多羅は同伝によれば、武徳九年十二月に長安にいたり、貞観三年に勅命によって彼の訳場が設けられ、當時を代表する学僧十九名が全土より集められた。そのなかには法琳もまた綴文として加わっていたのであつた。波羅蜜多羅が皇太子の病氣を治療した時期については明記されていないが、彼は貞観七年に長安で没したとされるから、あたかも秦世英が治療したという貞観五年ころに合致することになる。皇太子李承乾はもとと足を患い歩行困難であつたと伝えられるが、このころ大病に罹つたらしい。しかも、その治癒に効果があつたのは、仏教側の記録では明らかにしていないけれども、どうやら秦世英の医術であつたと見うけられる。イン

ドなどの異域の僧に病氣治療などの神秘的な能力を求めようとするのは、唐朝においても変わらない。しかし波頗蜜多羅が必ずしも医療に精通していたとはかぎらない。むしろ仏教を伝法するために長安にまで至った彼の本意ではなく、こと志と異なっていたはずである。彼について「本志 頽然とし、雅懷 訴うる莫」く(同上)、かくて病に罹ったと伝えられているのは、このような事情も含まれていたのかもしれない。

とまれ、こうした事情から仏教側では道教に一籌を輸していたらしい。仏教側がとりたてて秦世英の非を鳴らすのも理由のないことではなかったのである。

五、彦悰の著述をめぐって

法琳に関する基本的な資料を提供しているのは、『法琳別伝』にほかならない。この書の著者彦悰は、陳垣『中国仏教史籍概論』巻三・広弘明集の章などでもすでに論じられているように、『統高僧伝』巻二に立伝される隋代に翻經館の僧として活躍した彦悰としばしば混同され、後世の記録は混乱している。彦悰については『宋高僧伝』巻四(T五〇一七二八c)に伝が立てられている。同伝には、隋の彦悰との優劣を問われた彦悰が、「心宗の玉宗を慕うは、故より以有るなり」と答えたことと記されるから、隋の彦悰は、たまへんの「琮」、唐の彦悰のほうは、りっしんべんの「悰」で表記されねばならない。ところがこの彦悰伝は、ほとんど彼の著述の一つである慈恩伝の序文の抜粋にすぎず、彼自身の事跡について詳しくは知り得ないのである。

ここではひとまず、大正蔵卷五五に収録されている『内典録』(六六四年)・『開元録』(七三〇年)・『貞元録』(七九九年)などの唐代の経録に拠りつつ、彦悰の著述について知られることを整理しておきたい(以下大正蔵卷五五に収録されるものについては頁数のみ記す)。

現在のところ、彦悰の仏教にかかわる著述として次の六点が挙げられる。

- (Ⅰ) 『唐護法沙門法琳別伝』三卷（存。大正藏卷五〇・敦煌写本P.3901）
 - (Ⅱ) 『大唐京寺録伝（大唐京寺録）』（佚）
 - (Ⅲ) 『集沙門不応拌俗等事』六卷（存。大正藏卷五二）
 - (Ⅳ) 『菩薩修行四法経序』（佚）
 - (Ⅴ) 『仏頂最勝陀羅尼経序』（存。大正藏卷一九—三五五a—b）
 - (Ⅵ) 『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』十卷（存。大正藏卷五〇）
- 以下に順次取りあげておく。

(Ⅰ) 『法琳別伝』

この書の著述年代は明らかでないが、すでに触れておいたように、『統高僧伝』がひとまず成立した貞観十九年（六四五）から『法苑珠林』が著された總章元年（六六八）までのことと考えられる。さらに六六四年に成立した『内典録』には著録されていないから、もし同録に遺漏がなかったとすれば、断定はできないけれども、六六四年から六六八年のころの可能性もある。ところが、この書は唐代では一時期禁書になっていたものであり、『開元録』卷十三（六二五b）に、

漢法本内伝五卷 未詳撰者

沙門法琳伝三卷 沙門彦悰撰

右二部伝、明勅禁断、不許流行、故不編輯。

という記事がある。その理由については明記されていないが、唐王室の出自が隴西の李氏ではなく、拓跋達闐

の後裔であることを直書していたためであるらしいと推測されている。ただし禁書とされたにもかかわらず、伝写が行われ、ほとんど実効はなかったのである。そこでおよそ七十年後に完成した『貞元録』になると、

沙門法琳伝三卷 沙門彦琮撰

右一部伝。旧録云、明勅禁斷、不許流行、故不編載。今詳此意、蓋在一時、然不入格文。望許編入貞元目録(卷三・九五九b)

と言い、旧録すなわち『開元録』で禁書としているのは一時的な措置にすぎないとして、採録されたのであった。同録の卷一「総録特承恩旨録」(七七四a)によれば、この書は、宦官馬承倩の上奏によつて、『大仏名經』『統開元釈教録』とともに編入されることになったと伝えられる。ところが『貞元録』では、べつに、

別伝三卷 法琳撰(卷三・九五九a)

別伝三卷 貞觀年中僧法琳撰 四十五紙

開元録不入目。今於貞元十五年、奉勅編入目録流行(卷三〇・一〇四六a)

もまた著録されている。どうやら『法琳別伝』を法琳自身の著述とみなして混乱をきたしてしまったようである。この混乱は五代(九四六年)の『統貞元釈教録』(一〇五三a)にいたつて訂正されている。なお、『貞元録』とはほぼ同時期の慧琳『一切経音義』卷八八(T五四—八六八c以下)にも、『音法琳法師伝』五卷が含まれていることを付けくわえておく。

(Ⅱ)『大唐京寺録伝』

この書については、『内典録』卷五(二八三b)に、

大唐京寺録伝 一部十卷 龍朔元年修緝

沙門不敬俗録 六卷

右二部。京師弘福寺沙門釈彦琮。

と見えている。ついで前者のみとりあげて解説し、梁の『梁京寺記』⁽⁴⁾や北魏の『洛陽伽藍記』に匹敵するものが京師にはないために、彦琮が発憤して著したもので、「文寔に鋪発、事も亦た典拠あり」と評価する。また同録巻一〇（三三三^a）には、彦琮の著述として『大唐京寺録』のみが挙げられている。『内典録』ではこの書を彦琮の名著と目しているのである。同録によれば、この書は龍朔元年（六六〇）に撰述され、彦琮は弘福寺に住していたとされる。なお、『法苑珠林』巻一〇〇（大正藏本・T五三一〇二四^a）では「西京寺記二十卷」と記録されているため、別名もあったらしい。

ところが『開元録』になると、この書は著録されず、『集沙門不拝俗議』を解説したのち、「兼ねて『大唐京師寺録』を撰す。世に行わる」（巻八・五六三^a）と言及するのみである。『貞元録』は『開元録』を踏襲したにすぎない（巻十二・八六三^a）。したがって、この書は開元年間にはなお知られていたけれども、さほど注目されなくなっていたらしいのである。『新唐書』巻五九・藝文志三には記録されているが、当時現存していたことを証明するものではない。あるいは安史の乱の前後にでも亡佚してしまったものであろうか。

これに関連して問題になるのは、津逮秘書等に収められて現存している唐沙門彦琮撰『後画録』一卷のことである。この書には彦琮の序文が附けられており、彼が『帝京寺録』を著すにあたって参観した長安の名画を描いた画人二十七人を品評した旨が記され、貞観九年三月十一日の日付がある。この『後画録』についてはすでに『四庫提要』（子部二四）で偽書であると断定している。二十七人の最後に取りあげられている李湊とは玄宗の頃の人物であり、太宗の時代に生きた彦琮の著述に含まれるはずがないとするのである。しかし、そのみの理由であれば、当該項目のみが後世に加筆された可能性も考えられよう。晩唐の張彦遠『歷代名画記』に

は、その巻一に隋の沙門彦悰に画評があったと伝え、また巻七から巻九までに僧悰の品評二十七カ条を引用している。そこで近人は『歴代名画記』と照合しながら、現行本『後画録』の真偽について論じているが、なお一致した見解が得られていない。当面のところ、この書に閱して気づいたことのみ記しておきたい。

まず、この書の序文の日付には疑問がある。たとえば、『帝京寺録』とは『大唐京寺録伝』のことであろう。『大唐京寺録伝』はさきのように、龍朔元年(六六一)の撰述という記録がある。それと平行して、もしくはその後著されたはずの『後画録』を二十数年以前の貞観九年(六三五)の著述とするには、いかにも無理がある。また、彦悰には(Ⅵ)の慈恩伝の著述があり、僧慧立が五巻に纏めてあった玄奘の伝記を箋述して十巻にしたのであった。それは慧立の没後に彼の門弟に委嘱されたのであって、同書に附けられている彦悰の序文の書きぶり(T五〇―二二a―b)では、慧立は彼のかなり先輩であったと推測されるのである。『集古今仏道論衡』巻丁(T五二―三八b―c)には慧立の略伝が記されている。それによれば、慧立は貞観三年に年十五で出家しているから、貞観九年には二十一歳となる。彼より後輩の彦悰はそのころせいぜい十代であったはずであり、出家していたことすら疑問とせねばならない。この序文が偽作であることはすでに疑われている(余紹宋『書画書録解題』巻九)。序文を偽作として全面的に斥けるにはなお慎重を要するが、記されている日付については承認できない。

次に、『歴代名画記』には寶蒙『画拾遺録』も引用されているが、その引用によるかぎり、寶蒙は彦悰の品評に対してしばしば反駁していたことが推知される。とくに唐の唐薩陀の項(『歴代名画記』巻九)では、「^{④③} 驚公の評、過当なり」と直截に批判している。寶蒙は肅宗・代宗の時代の人である。さらにまた、会昌年間の人とされる朱景玄の『唐朝名画録』(『範長寿の項』)に「^{④④} 僧彦悰統画品」として引用されるのも『後画録』のことであろう。したがって、この書は安史の乱前後から晩唐においても知られていた形跡がある。ただし『歴代名画記』

卷一では、僧悰の評には誤謬があるうえに、「伝写又復た脱錯し、殊に看るに足らざるなり」と伝え、当時伝写されて流布していたテキストに誤脱があったと指摘している。唐代に流布していたものについては、彦悰の真撰と見なしうるであろうが、南宋の『郡齋讀書志』（王先謙校刊本卷一五）の頃にはすでに現行本に類似していたらしく、その原型を探るのは容易ではない。

（Ⅲ）『集沙門不応拝俗等事』

この書は、『内典録』卷五（二八三）に「沙門不敬俗録 六卷」、『法苑珠林』卷一〇〇に「沙門不敬録 六卷」（大正藏本・T五三一・一〇二四a）と著録される。さらに『開元録』にいたると、それまで彦悰の著述として記録されていた三著のうち、『法琳別伝』は禁書とされ、『大唐京師寺録』は簡単に言及されるにすぎず、この書が彼の主著のように見なされている。同録卷八（五六二）には、

集沙門不拝俗議六卷 見内典録

右一部六卷。其本見在。

と記したうえで、龍朔二年（六六二）に詔によって僧尼に君親を拝せしめようとして、百官にその当否を議論せしめたさいの記録を編纂したものであると解説している。したがって同録卷十三（六二四）では、彦悰の著述としてこの書のみが、

集沙門不拝俗議六卷 大唐弘福寺沙門釈彦悰撰 出内典録 新編入藏

と著録され、卷二〇の入藏録（六九七）にも含まれている。こうして『開元録』によって書名がほぼ確定されるときともに、入藏されて現在まで伝わることになっている。この書名は、彦悰によるこの書の総論が「沙門不応拝俗総論」であり、『広弘明集』卷二五（T五二・二九一）にも収録されていたことに因ったのであろうか。

なお、『貞元録』(卷十二・八六三a)はその踏襲にすぎない。

(Ⅳ)「菩薩修行四法經序」

この序文については、これまでまったく言及されていないが、地婆訶羅(Dharmakara 六一二―六八七)によって訳出された同経に附けられていたものである。地婆訶羅の中国名は日照。勅命によって設けられた訳場で、永隆元年(六八〇)から垂拱元年(六八五)までの六年間に十八部三十四巻の經典を訳出している。『開元録』卷九(五六三c)には地婆訶羅の訳業を列挙しているが、そのなかに、

大乘四法經一卷 初出 見大周録 永隆元年 於東太原寺訳

菩薩修行四法經一卷 永隆二年正月 於京弘福寺訳 沙門彦棕製序 第二出 与前大乘四法同本 於京再出

が含まれている。この經典は永隆元年にまず洛陽の東太原寺(のちの大福先寺)で訳出されたのち、翌年になって長安の弘福寺で再訳されたのであった。当時弘福寺に住していた彦棕も、その翻訳に関わったのであろう。現在の大正藏卷一七には『大乘四法經』『仏説菩薩修行四法經』ともに収められているが、彦棕の序文は欠落してしまっている。

(Ⅴ)「仏頂最勝陀羅尼經序」

この序文もまた地婆訶羅の翻訳にかかる同経に附けられたものである。この經典は尊勝陀羅尼を説く經典群のなかでも、早期に翻訳されたうちの一本である。この經典については、ほぼ時期を同じくして五訳が世に出しており、ともに現在の大正藏卷一九に収められている。すでに『開元録』卷十二(六〇〇a)には次のように著録している。

- 仏頂尊勝陀羅尼經一卷 大唐朝散郎杜行顗奉制訳 出大周録 第二訳
 仏頂最勝陀羅尼經一卷 大唐中天竺三藏地婆訶羅訳 拾遺編入 第二訳
 仏頂尊勝陀羅尼經一卷 大唐闍賓沙門仏陀波利訳 出大周録 第三訳
 最勝仏頂陀羅尼淨除業障經一卷 大唐中天竺三藏地婆訶羅於東都再訳 拾遺編入 第四訳
 仏頂尊勝陀羅尼經一卷 或加咒字 大唐三藏義浄訳 新編入録 第五訳
 右五經同本異訳

このうち彦悰が関わった地婆訶羅訳は第二訳であり、『開元録』卷九（五六四a）にはまた、

仏頂最勝陀羅尼經一卷 第二出 与杜（行）顗等出者同本 永淳元年五月二十三日⁴⁸⁸ 於京弘福寺共沙門彦琮⁴⁸⁹訳 彦琮兼製
 序

と見えている。この經典も永淳元年（六八二）五月に弘福寺で訳出されたのであった。彦悰の序文には次のような経緯が記されている。

この經典はまず、朝散郎行鴻臚寺典客令という官にあった杜行顗が、寧遠將軍であった度婆とともに、勅命によつて儀鳳四年（六七九）正月五日に訳出した。第一訳である。ところがこの翻譯には忌避した字が多く仏典常用の術語までを改変していた。あらためて勅命が下されて改訳されるはずであったが、事情があつて中止していた。ほどなく、中天竺の地婆訶羅が洛陽・長安の東西兩太原寺や長安の弘福寺で仏典の伝訳に従事するようになり、杜行顗や彦悰もその訳場に加わった。杜行顗は彦悰にこの經典の改訳を委嘱したのであるが、遅延しているあいだに彼が死去してしまつた。そこで彦悰は道成などの沙門十人に助力を求めるとともに、地婆訶羅に再訳を請うて、永淳元年（六八二）五月二十三日に訳出されたのが、この第二訳の『仏頂最勝陀羅尼經』である、というのである。

この經典の訳出に近い時代の『開元録』卷九(五六四a)、『続古今訳経図紀』(二六八c。七三〇年成立)などの「仏頂尊勝陀羅尼經」項や「清信士杜行顗」項などの記述には、『尊勝陀羅尼經』の梵本は、罽賓の仏陀波利が五台山の文殊菩薩の示現によって中国に伝えたのであるという話、地婆訶羅が杜行顗などとともに第一訳に参与したという話なども伝えている。しかし彦棕の序文ではそれらの話にまったく言及してはいない。それらの話は第三訳の仏陀波利訳の序文にいたってはじめて記されるのである(T一九—三四九b)。「開元録」ではすでに第三訳の序文に矛盾のあることを指摘し批判的ではあるが、やはりそこに付加されている靈驗譚に眩惑されてしまったらしく、後世ではそれを踏襲することになっている⁴⁹。尊勝陀羅尼は、汎く流布してゆくが、この陀羅尼を説く經典の訳出された初期の状況について最も確実な資料を提供しているのは、これまでほとんど無視されているけれども、この彦棕の序文にはかならない。

とまれ、(IV)「菩薩修行四法經序」と(V)「仏頂最勝陀羅尼經序」によって、彦棕が永隆二年・永淳元年(六八一・六八二)ころにも長安の弘福寺に住しており、おそらくその長老として地婆訶羅の訳経に参与していたことが知られるのである。

(VI)『大唐大慈恩寺三藏法師伝』

慧立の原本五卷に彦棕が箋述して十卷としたというこの書は、玄奘の事跡を伝える問題の書であり、それ自体これまで詳しく検討されてきている⁵⁰。ここでは彦棕の他の著述との関連でいささか気づいたことのみ記しておく。

さて、この書にも彦棕による序文が附けられていて、「垂拱四年(六八八)三月十五日仰上」という日付がある⁵¹。このころに十巻が完成して朝廷に奏上されたのであろう。したがって、彦棕の著述活動のなかで最も遅く著

されたものと考えられる。さらに、この著述も弘福寺で行われたらしいことは、この書を最初に著録している『開元録』に、「沙門釈慧立」遂撰慈恩三藏行伝、未成而卒。後弘福沙門彦悰続而成之。總成十卷」（卷九・五六四c）と記していることから推測される。

いったい、彦悰の序文では、この書の原著者の慧立を「魏国西寺の前沙門」と記しているが、魏国西寺とは西太原寺にほかならない。慧立は太原寺寺主に任ぜられていたのであり、「大唐西太原寺沙門釈慧立」とも表記されることがある。西太原寺は咸亨元年（六七〇）、長安の休祥坊のもと侍中楊恭仁の宅であつた所に建立されたもので、垂拱三年（六八七）十二月に魏国寺と改称され、載初元年（六九〇）にまた崇福寺と改められたのであつた。彦悰の住していた弘福寺は修德坊に在つたから、休祥坊の北東に位置し、両寺院は近接していた。しかもさきに触れたように、この慈恩伝が完成する数年前には、地婆訶羅が両寺院に滞在して訳経に携わり、その訳場に彦悰も関与していたのであつた。したがって慧立の没後に散佚していたというこの書の編纂を、彼の門人たちが彦悰に委嘱したというのも、あながち不自然なことでもないのである。

なお、ここに取りあげた六点の著述のほかにも、「大唐故左衛翊衛武騎尉王府君墓誌銘并序」という一文が『八瓊室金石補正』卷三九に採録されている。これは王行威という人物のために垂拱二年（六八六）に撰述されたもので、「招福寺上座彦琮撰」と記されている。原石が失われているために確認するすべがないが、これは「弘福寺上座彦悰撰」の誤写であろう。また、『旧唐書』卷四七・経籍志下、『新唐書』卷五九・藝文志三、『通志』卷六七には、彦琮撰「崇正論六卷」が著録されている。もしこの書が、慧琳『一切経音義』卷八七（下五四一八六三c以下）に収められている「崇正録十五卷」に相当するならば、これも彦悰の著述である可能性があらう。

以上から彦悰についていささか知り得たことをまとめてみると、彼の著述活動は六六〇年代から六八八年の

慈恩伝にいたるまで、おおよそ二十年間にもわたっている。当時彼は、その著述によつて知名の僧の一人に数えられていたことであろう。またその著述はすべて弘福寺においてなされたはずである。おそらく晩年まで弘福寺に住していたのであろう。『宋高僧伝』巻四の彦惊伝は、「唐京兆大慈恩寺彦惊伝」として立てられている。彦惊が大慈恩寺に住していたという記録は見あたらず、この標目は当たらないであろう。玄奘の門下であったとも言うが、これも定かではないのである。むしろ注目されるのは地婆訶羅の訳経に関与していることであろう。

(了)

注

- ① 前稿注(20) 礪波論文参照。
- ② 『旧唐書』巻四七・経籍志下、『新唐書』巻六〇・藝文志四に「陳子良集十卷」。
- ③ 『全唐文』巻一三四、『全唐詩』巻三九などの略伝、および『冥報記』巻下も同じ。
- ④ 『隋書』巻四八・楊素伝、『北史』巻四一・楊素伝、『通鑑』巻一七八、同書巻一七九。
- ⑤ 『隋書』巻三〇・地理志中によれば、定襄郡には開皇五年から大業元年まで雲州総管府が置かれていた。『通鑑』巻一七九の胡注にもこれを引用する。
- ⑥ 前注『隋書』巻三〇・地理志中によれば、雁門郡は開皇五年に代州に改められ、大業初年まで総管府が置かれていた。
- ⑦ 『隋書』巻三七・李渾伝、『隋書』巻五一・長孫晟伝、『北史』巻十一・隋本紀上、『北史』巻二二・長孫晟伝、『北史』巻七六・李景伝、『北史』巻九九・突厥伝など。

⑧ ただし『隋書』卷二・高祖帝紀下、同書卷五五・杜彥伝によれば、楊素が突厥を驅逐したのち杜彥を雲州總管に任じており、それは仁寿元年九月である。したがって九月以前に突厥を撃破したことになる。『北史』『通鑑』などの記事と齟齬している。いま後者に従っておく。

⑨ 『蕭平仲誅』には彼を「梁文皇帝之玄孫、鄱陽王之曾孫也。鄱陽嗣三(王)之孫、定襄侯之第五子也」とする。定襄侯とされている父については不明。

⑩ 『隋書』卷二九・地理志上によれば、眉山郡は大業二年に眉州に改められた。しかし翌年にはまた州が郡にもどされている。

⑪ 陳子良はのちに相如県の県令に任ぜられたこと、弟の子幹が平城県の県正であったことなどから、県の主簿であった可能性が高い。

⑫ 『旧唐書』卷四一・地理志四、『太平實字記』卷七二、同書卷八六など。

⑬ 『統高僧伝』卷十三(T五〇―五三二a)。

⑭ 『通鑑』卷一八四・義寧元年十二月甲辰の下の胡注には『通鑑考異』などを引用して唐・李のほかに別使も蜀に派遣された可能性を示唆している。

⑮ 『旧唐書』卷五六・『新唐書』卷八七の蕭銑伝、『通鑑』卷一八五に隋将王仁寿が蕭銑に降ったことを記す。また「為蜀道安撫寿光公王季卿与王仁寿書」には「今承将军(王仁寿)擁兵雲夢、建旆荆門、水淹既多、疫癘逾甚」と言うことから、両者は同一人物であると考えられる。

⑯ 『旧唐書』卷九〇上・『新唐書』卷二〇一の駕德仁伝。なお『新唐書』卷二〇一・袁朗伝には隱太子の東宮に招かれた当時の名士十四名が記されるが、陳子良は含まれない。

⑰ 『大唐六典』卷二八、『新唐書』卷四九上・百官四上。

⑱ 『陳子幹誄』に「隋齊王暕、礼賢待士……召入平台」。『文苑英華』卷八四三では「隋齊王英」に作るも、『全唐文』卷一三四では「英」を「暕」に訂している。

⑲ 『旧唐書』卷四一・地理志四によれば、相如県には司馬相如の故宅²が残り、また相如坪には琴台の遺跡があった。

⑳ 『蜀中広記』卷二八。ただし同書では陳子良を陳子昂の兄とするなど粗漏である。

- ②① 拙稿『弁正論』と三論教学」(『三論教学と仏教諸思想』所収、春秋社、二〇〇〇年) 参照。
- ②② 唐臨の伝記については戸崎哲彦『唐臨事迹考』(『唐研究』第八巻、二〇〇二年)。
- ②③ 『冥報記』の現在知られているテキストには異同がある。ひとまず内田道夫編『校本冥報記』(東北大学文学部支那学研究室、昭和三十年十二月)に従っておく。
- ②④ 王五戒の話は、同じく『冥報記』巻下に「隋洛陽人」として出る。ただし話の出所が記されないため、岑仲勉『唐唐臨冥報記之復原』(『歴史語言研究所集刊』第十七本、一九四八年)では『冥報記』原本の話であることを疑う。なお天主とは天曹の役人であろう。
- ②⑤ 『貞観政要』巻六・仁傑第二〇、両『唐書』の張公謹伝、『唐会要』巻三八・辰日、『冊府元龜』巻一四一など。
- ②⑥ 前注所引の『唐会要』巻三八、『冊府元龜』巻一四一など。
- ②⑦ 岑文本はこの話以外にも、『冥報記』巻中の「唐・睦仁蒨」「唐・蘇長」「唐・岑文本」の話を提供していて唐臨とは親しい。この話に記されている岑文本の官職も信頼できると考えられ、岑文本が中書侍郎であったのは、貞観十六年(六四二)正月から貞観十八年(六四四)八月に中書令に昇任するまでのことである。『旧唐書』巻三・太宗本紀下、『新唐書』巻二・太宗本紀、『通鑑』巻一九六、同書巻一九七などを参照。また、この間で太宗が九成宮に行幸したのは貞観十八年四月から八月までのことに限られる。
- ②⑧ 前注②⑦の戸崎論文によればこの官は不明。
- ②⑨ この官は唐の長安年間に胄曹参軍事と改称された。『唐六典』巻二八、『旧唐書』巻四四・職官三、『新唐書』巻四九上・百官四上。
- ③① 『集古今仏道論衡』巻丙(T五二—三八五a)以下にもほぼ同文が見える。仏教側の記録はすべてこの範囲を出ない。
- ③② 大正蔵本『法苑珠林』では巻五五(T五三—七〇五a)、四部叢刊本では巻六九。
- ③③ また『大唐内典録』巻五(T五五—二八一b—c)をも参照。
- ③④ 『統高僧伝』巻三の波羅蜜多羅伝には、彼の葬儀にさいして皇太子の援助のあったことを記すが(T五〇—四四〇b)、かえってことさらな感じがしないでもない。

- ③④ 前注①『彌波論文』では彦暲が『宋高僧伝』に立伝されていることを見落としているようである。
- ③⑤ 『貞元録』は後世に刪補されていることが知られているが、ここでは考慮しないでおく。
- ③⑥ 前稿注(8)参照。
- ③⑦ 『内典録』卷五(T五五—二八三b)と『法苑珠林』卷一〇〇(大正藏本・T五三—一〇二三b)には、道宣と道世の全著述が相互に記録されていて、両書は平行して著述されたと見なされる。
- ③⑧ 以上については前注①『彌波論文』を参照。
- ③⑨ 『開元釈教録略出』卷四(T五五—七四六b)に『開元釈教録』の「故不編載」に続いて「然代代伝写」と追記がある。ただし智昇撰とされている『開元釈教録略出』についてはなお検討を必要とする。方広錫『仏教大藏経史』(中国社会科学出版社、一九九一年)二七四頁以下など参照。
- ④⑩ 大正藏の校勘記によると正倉院聖語藏本『貞元録』所載の馬承倩の上奏には「法琳別伝」が欠けている。
- ④⑪ 原文は「江表梁室著記十卷、東都後魏亦流五軸」。前者は現在大正藏卷五一に収められている『梁京寺記』のことであろう。ただし現存のものは断簡にすぎない。
- ④⑫ 『集古今仏道論衡』は龍朔元年(六六一)の成立とされる。『開元録』卷九(T五五—五六四c)、『貞元録』卷十二(T五五—八六四c)の慧立の略伝、『宋高僧伝』卷一七(T五〇—八一三a)の慧立伝にも同じ記述がある。
- ④⑬ 『歷代名画記』卷八の田僧亮・孫尚子・董伯仁の項、卷九の閻立本・尉遲乙僧の項を参照。
- ④⑭ 寶蒙注『述書賦』卷下などを参照。
- ④⑮ 『新唐書』卷五九・藝文志三に「宋景玄唐画断三卷 会昌人」。
- ④⑯ 地婆訶羅が中国に到ったのは、『開元録』卷九(T五五—五六四a)などでは儀鳳初年、『華嚴経伝記』卷一(T五一—一五四c)などによれば、永隆初年ころとしている。
- ④⑰ また『貞元録』卷十二(T五五—八六四a)。
- ④⑱ 底本となっている麗本は「二」。宋元明三本に従う。
- ④⑲ 現在にいたるまで『尊勝陀羅尼經』にかんする辞書等の解説は、ほとんど第三訳の仏陀波利訳の序文に従っているが、この序文に矛盾が含まれていることは、すでに『開元録』卷九(T五五—五六五b)で詳しく指摘されている。

なお六九五年成立の『大周衆經目錄』卷四(T五五—三九六c)にはこの經典の第三訳・第四訳のみを著録する。

⑤① たとえば宇都宮清吉「慈恩伝の成立について」(『中国古代中世史研究』創文社、一九七七年)。

⑤② 大正藏卷五〇—二二〇c。広勝寺本金藏や『大唐大慈恩寺三藏法師伝及考異・索引』(朋友書店、一九七九年)も同じ。ただし大正藏の校勘記によれば宋元明三本・宮内庁図書寮本にはこの日付を欠く。

⑤③ たとえば『開元録』卷十三(T五五—六二四c)。

⑤④ 小野勝年『中国隋唐長安・寺院史料集成 史料篇・解説篇』(法藏館、一九八九年)参照。

⑤⑤ もし誤写でなければ、招福寺は当時長安の崇義坊に在った寺院である。前注小野著『史料篇』五〇頁・『解説篇』二〇頁参照。